



★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①応援してね 泳ぎの練習中

— アメリカビーバー —

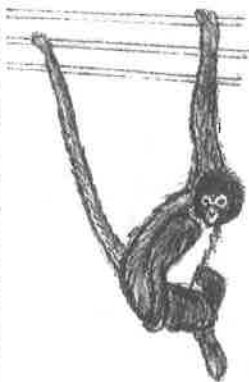
4月23日生まれの3頭の赤ちゃんはすくすく育ち、体重は2.5kg程(取材当時)。母乳もたまに飲みますが、サツマイモやキャベツなど、おとなと同じエサも食べています。両親はとても子ぼんのうで、子供たちが遊びに出かけるとくわえて巣に連れ戻そうとする過保護ぶり。動物公園では飼育員さんは子育てに関わらないのが基本で、育児放棄などやむを得ない場合は介入しますが、子育て上手なマツコ・キン夫婦にその心配はありません。



そんな親子を見に行くのにおすすめなのは、くもりや雨の日の夕方。夜行性のため、16時頃から動き始めているかも。また、巣に入っていたとしても、くもりや雨だとガラスの反射が少なく観察しやすいです。雨の日の動物園は、静かでまた違った良さがありますよ。成長が早いので、小さな赤ちゃんを見られるのは今だけ。お早めに。(CZV 種)

②しっぽを枝にまきつけてぶら下がる

— ジェフロイクモザル —



中南米の熱帯雨林の樹上で群れて暮らしています。細長い手足、体長の1.5倍ほどの長さの尾、手の親指は退化して4本指で、尾が器用に動いてものをつかんだりします。同じサル比較舎のパタスザルは、サバンナを疾走するため手足が長く、尾は走るためのバランスをとる役割です。比較すると面白いですね。鳴き声は警戒をする場合に犬のように大きな声で

なくことがあるとのこと。当園の2頭は、上野動物園生まれのメスのリン(茶色、9歳)と、岡山県池田動物園生まれのオスのノゾミ(薄茶色、8歳)です。大変仲良しで、2世誕生が待たれます。ジェフロイクモザルは絶滅危惧種の中程度に指定されており、全国に約70頭が飼育されています。(CZV Y)

③大きな口と目が愛らしい

— オーストラリアガマグチヨタカ —

その名の通り、口金つき財布のような大きな口でちょっと個性的な顔立ち。オーストラリア大陸とタスマニア、ニューギニア南部の森林に生息する夜行性のヨタカ目の鳥で、昆虫やトカゲ等を口ですくって捕食します。



特徴的なのはその顔と、昼間は木の枝に擬態してじっとしているという変わった習性。絶滅危惧の度合いが「^{低懸念}低懸念」になっているのはそのお陰かも。

園にいる2羽の名はイチゴ(オス)とチーズ(メス)、両方とも14~15歳で、エサはハツカネズミを与えています。繁殖実績はまだありませんが、園としては自然体で待ちたい意向です。

「口も目も大きく愛らしいこの鳥をぜひ立ち止まって見てほしい」とは飼育係Kさんの言。夜行性動物の展示場で2羽並んで皆さんを待っています(CZV ほ)

④バラレルワールド?

— クロミミマーモセット —

動物の着ぐるみを着た人が魔法で小さくされてしまったような奇妙な姿。^{端正な}端正な顔立ちに白い額が^{ひん}神々しく、長いしっぽをなびかせながら素早く走り、跳びます。ガラス越しにじっと見てみると、向こうもこちらをのぞき込んで不思議そうに首をかしげることがあり、ただの「かわいい」とはちがう感動を味わえます。

南米の森林地帯で樹上生活する小さなサルの仲間、耳の黒い房毛が特徴。通常、両親と子どもたちからなる小さな群れで暮らし、樹液、果実、昆虫を食べます。育児は家族で協力して行われ、姉妹も赤ちゃんを背負

ったりして育児のやり方を学びます。子は生後1か月ほどから少しずつ背中を離れ、独り立ちしていきます。(CZV 金)

「オロギを食べている」



⑤個性豊かな2頭のオス — アフリカライオン —

幼いころ人に育てられたアレンは人に対して物怖じしないので、ガラスの近くで横になっている事がよくあります。好き嫌いもなく与えられた肉は何でも食べ、ミートキャッチャーでも大活躍！寝室にある丸太で遊ぶこともあり、好奇心旺盛な12才です。

ライオンの両親に育てられたトウヤは14才。警戒心が強く慎重な性格。鶏頭や屠体給餌のイノシシ肉などはあまり好みません。屋外展示場のコピエの上で吠える姿は百獣の王らしい風格があります。2頭とも日中は寝て過ごすことが多いですが、比較的朝夕は動き回る姿が見られます。

ライオンは絶滅危惧種に分類され、野生での生息数は減少傾向ですが、日本の動物園では比較的繁殖が安定しているため、当園では繁殖の予定はありません。

外見は似ていても中身は全然違う。そんな2頭の姿は、動物にも1頭1頭豊かな個性があることに気づかせてくれます。(CZV 松)



⑥ほんとうは 巨大な翼がかっこいい — アフリカハゲコウ —

コウノトリの仲間であフリカに生息し、頭とどの皮膚がむき出しになっているのでこの名前がつけました。当園で飼育されているのは17歳以上のオス1羽で、よく見ると愛らしい顔をしています。ぜひ見ていただきたいのはピンク色の大きな“のど袋”。求愛時はこの袋をふくらませてヒュー、ピュー等の音を出しますが、園では夕方部屋に帰る時などにも音を出すことがあるようです。

広げると2mを超える大きな翼をもち、野生では空高く飛ぶこともありますが、その時の長い首はタンチョウのように伸ばして飛ぶのではなく、縮めているとのことです。サハラ砂漠以南のアフリカに多く生息していますが、国内では9園館で15羽(2025年3月時点)だけです。(CZV N)



★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

《番外》生き物いろいろ — 大池(その2) —

正門近くにある大池は、木々に囲まれ散策に適した場所ですが、奥の方3分の1ほどは生物を保全するために立入禁止となっています。どんな生物がいるか専門家に調査を依頼したところ、さまざまな珍しい種が確認されました。

そのうちの1つがキシノウエトタテグモ。千葉市では最重要保護生物に指定されている在来種の原始的なクモで、よく見かけるクモのように高い空間に糸で巣を張らず、土に細長い穴を掘ります。穴の入り口にフタを糸でぶら下げ、押して出入りができるようにして中で待ち構え、穴の前を虫が通りかかったら飛び出して捕まえるのだそうです。この巣穴は雨が直接あたると壊れやすく、乾燥しすぎても作りにくいので、石垣の隙間などの適度な湿り気のある所に作られます。

糸を出し風にのって遠くまで移動する種とちがい、歩くしか移動手段のないこのクモは狭い範囲で群生するため、開発などで地域の環境が破壊されると一気にいなくなってしまいます。大池の奥の方には生息が確認されていますが、アリのくわいに小さいこのクモを見つけるのは至難の業。どうぞそっとしておいてください。暗い穴の中でドアの前を獲物が通りかかるのを待ち続けるクモの暮らしを想像しながら、大池周辺の散歩を楽しんでいただけると幸いです。(CZV 金)

